
運命

海上なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命

【Nコード】

N8179E

【作者名】

海上なつ

【あらすじ】

季雨の些細なハプニング。それは偶然か必然か。そこから青年と出会うことになるが、その時は恋愛の「れ」の字もない。季雨からしたらむしろ逆の印象。恋のキューピットはとても意外な人。平凡な日常の中で、三人の奇妙な関係がここに成立。

（前書き）

この話は「その他」に近いジャンルだと思います。それを承知の上でお読みください。

部屋の小さな窓に、雨粒がぶつかる音がしている。

私は無造作に布団から起き上がると、テレビの電源を入れた。

「今日は全国的に雨になりそうです。しかし、午後からは次第に晴れるでしょう」

ちょうど朝の天気予報をやっていた。

そういえば　と、ふいに私は思い出した。希雨^{きう}という名前のせいか、中学の同級生に『雨女』と呼ばれていたのだった。

きっかけは、たぶん一年生で行くことになっていた遠足の日のことだ。それまで不運にも雨が続いていて、天気予報ではその日も一日中雨だということだった。それを友達が軽い冗談で、私のせいにした段階では、まだきつと『雨女』は正式に誕生していなかった。でも当日、私が熱をだして『遠足は休む』と学校に連絡したとたん、雨はやんだのだ。

……全く、偶然てのは恐ろしい。

あ！　どうか『主人公は雨女』って覚えるのはやめてほしい。今から、ちゃんと自己紹介をしますので（といっても簡単に）。

私、形梨^{かたなし} 希雨^{きう}。十八歳。今はアパートの302号室に一人で住んでいる。　いつても、高校卒業してから一人暮らしを始めて、まだ一週間しか経っていないから、自分のいる町すらよく知らない。だから今日、道やお店を覚えるために、ちょっと遠くまで散歩してみる予定だった。

これから、晴れてくれるといいんだけどね。やっぱり出かける気分にはなれないもの。

そういうわけで、雨が上がるまで、私はテレビなどを見て適当に

過ごした。

そして二時過ぎ頃になると、空はやつとキレイな色を取り戻してきた。

早速外へ出る。

「いつてきまーす」

誰もいないと分かっているながら、なんとなく言ってしまう。

ゆつくりと景色を見ながら進むと、大きな公園についた。

並木に沿って土の道を歩いていると、一瞬、強い風が吹いて、木や葉を揺らした。

「ひゃ！」

ボタツと重い雫が落ちてきて、思わず悲鳴を上げてしまった。

すぐにポシエットからハンカチを出して濡れた髪を拭いていると、後ろにいた男の人と目が合った。

ああ、恥ずかしい。

その人はどうやら何ともなかったみたいだ。私、やっぱり雨女なのかな……。

気まづくなつたので、速い足取りで退散した。

それから、しばらくして。

私の後を誰かがつけている、と感じた。まだ人が多い時間だから大きな心配はいらないとは思ったけど、やっぱり一度意識してしまうと怖い。

私が止まると足音が消えて、私が走ると一寸遅れて足音も速くなっているようだ。

もう一度止まってみる。そして、思い切って振り返った。

携帯をいじっている人、誰かを待っているように時計ばかりを見る人、うつむいて何かの看板を見ている人。……どれも怪しい行動ではない、かな。

勘違いだったのだろうか？

今度は気にしないようにして、また歩きだした。

何気なく角を曲がると、間をあけて足音が近づいてきた。しかもこの道には、人がいなかった……。

と、急に後ろの誰かが私の方へ走り出した。見なくても、絶対、そうだ。

ヤバイ！

そう思うと同時に、近くの建物に逃げ込んだ。そのまま中の短い階段を夢中で上り、突き当りのドアを叩いた。

「あ、あのっ。 すいませ、ん！」

呼吸が正常じゃなくて、ちゃんとした言葉にならなかった。

でも、ドアは思ったより早く開かれた。

しかも、何故が開けてくれた人物は、私を快く迎えてくれた。

「はいはいはい。 どうぞー」

「えっ、と、おじゃまします……？」

中へ入ると、その人は落ち着きのない私をソファーまで案内してくれた。ちよつと小さいけれど、黒くてふかふかだ。

そして「ちよつと待っててね」と言つて、すぐに見えなくなった。やがて、やかんに水を入れる音が聞こえる。台所だろうか？

冷静を取り戻して、あの人がかつちに帰ってくるまでに状況整理を完了させなくては！

まず、あの人。背が高くて痩せた、若い男性。白に近い灰色のスーツを着ていて、髪も自然体なんだろうけど、清潔感がある。好印象だ。

この建物は、他に人のいる気配がない。意外と狭いし、静かだし、大体慌てた他人がいきなり入ってきてるつてのに、見に来ないなんておかしい。どうしたんだ？と思うはずだ。

とはいうものの、実際あの男。ドアを開けた本人は、少しも驚いた様子がない。とぼとぼと今もお茶を注いでいる（音が聞こえる）。

もしかして、そういうのが慣れているのだろうか？それにしてもここ、目立たない所に建っているけど、何かの事務所？

よく見ると、窓には『水里探偵事務所』と書いてあった。

あの人が探偵だったなんて！

「お待たせしました」

いつの間にか、あの男はこっちに熱いお茶を持ってきて言った。それから私の目の前に座ると、「どうされました？」と訊いてきた。

「えっと……誰かに後をつけられているような気がするんです。それで、相談に」

わざわざお茶まで用意してもらって「探偵事務所だとは知りませんでした」なんて帰るわけにはいかない。

探偵なら、どうにか少しはこの恐怖を解消してくれるんじゃないかと期待して、話すことに決めた。

「ストーカーですか？ 何か心当たりは？」

「ありません。第一、この町に引越してきたのは最近ですし」

「となると、怨恨が原因の可能性は低いか……。では、気になり始めたのはいつ頃から？」

「えと、一時間くらい前、ですかね」

「では、あなたが外へ出てからここへ来るまでのことを話してください」

私は軽くうなずいて、できるだけ細かく説明した。

「なるほど、だから髪が濡れていたんですね」

木のそばなんかにいなければよかった。まだ少し冷たい。

「ちなみにそのハンカチ、どうしました？」

「濡れたから、そのまましまうのも嫌だったので確か……手に持ったまま……あれ？」

「落としたんじゃないですか？」

「……そうみたいです」

「では答えは簡単です。その人はあなたのハンカチを拾って渡そうとしてくれたんです！」

「いや、でも、名前なんて書いていなかったし、それに」

「落とした瞬間を見ていた人なら問題ない。　いたでしょ？　そういう人」

よく思い出してみると、目が合ってしまった男の人しか近くにいなかった。かなり急いで歩いたから、顔でも見てないと見失ったら誰だか分からなくなってしまう。だから彼も一生懸命に私を追っていたのかな。

私と同じくらいの年齢だった気がする。あの人の顔、私も覚えてる。今度は逃げないで、しっかり謝らなくちゃ！

「本人、来てると思いますよ」

探偵さんはそう言いながら玄関へ向かい、ドアを開けた。

「あつ！」

私は思わず指をさしてしまった。

入口に立つ人物　公園で目が合った男の人を。

「すいませんでした！！」

私を見て、いきなり彼は頭を下げて謝った。彼、顔が真っ赤だ。謝らなきゃいけないのは私の方なのに。

「脅かすつもりはなかったんです！　ただ、これを返したくて

あの、お名前は？」

「形梨　希雨ですけど……。　ええつと、こちらこそごめんなさい！　私の勘違いで逃げたりして……」

「いえ！　僕のせいです！　それよりこれ、やっぱりあなたのだったんですね」

そして、彼は「はい」と言って私にハンカチを渡してくれた。

私はそれを受け取ると、代わりにお礼を言った。

「あ、それでは、失礼します」

彼はその後、逃げるように事務所を飛び出した。

「待って！」

呼び止めたのは、探偵さんの方だった。

「君は……それだけでいいのかい？」

考えているのか、少しの間の後、下で返事があった。

「はい。二度目がなければ運命とは言えないですよ」

私は慌ててドアの隙間から顔を出すと、笑顔で手を振った。

「本当にどうもありがとうー！」

彼は少し微笑んで、建物を出ていった。

でも実は、まだスッキリしないことがあった。

「なんで彼は、私が止まって振り返った時に渡してくれなかったんですかね？」

「……それも教えなくちゃならないのかな？」

「お願いします！」

「じゃあ、ヒント。 どうして彼は落し物を渡す前に、君の名前を聞いたんだと思う？」

「そりゃ、本人の物だと確認するためですよね？」

「でもそのハンカチ、自分の名前書いてないんですよ」

「あ、そうだった。 じゃあ別に意味はなかったんじゃないかな？」

「…… だったらそんな質問しないよ」

何ではつきり言ってくれないんだろう。

そういえば、彼に向けて言った探偵さんの「それでいいの？」ってどういう意味だったんだろうか。その後の彼の返事も意味不明だったし。

んー、まあいつか！

「あの、今日はお世話になりました」

ふと外に目をやると、もうすっかり夕方になっていた。

帰り道がちよっぴり不安になってきた。

「また何かあったら気軽に相談に来てね」

「はい、ありがとうございます」

私は久し振りに水里探偵の所へ訪れた。

「僕らが結婚するなんて知ったら、何て言うだろうね」

「でも五年前のことなんて憶えているかしら」

「大丈夫だよ。あの人はすごい」

そう言う彼は、ちよっぴりくやしそうだった。

続けて「だってあの人は、君より先に僕の気持ちに気付いたんだよ」とつぶやいたのと、ドアが中から開いて探偵さんが出てきたのがちょうど同じタイミングだった。

「こんにちは、これからお出かけですか？」

私は探偵さんに声をかける。

「やあ、元気だったかい？ 季雨ちゃんにエイキくん」

ちゃんと憶えていてくれた。英樹は不思議そうな顔だった。

「僕の名前は確か言っただけだったよ……」

「そのペンダントだよ。それを見る限り、何か嬉しい報告があるんだろうね？」

私と英樹の名前がローマ字で彫られている、特別な銀色のペンダント。私の手には指輪が光っている。

探偵さんはUターンして、事務所に戻っていきこうとした。

「あれ？用事があったんじゃないんですか？」

「猫を探してくれて依頼があったんだけど それよりもこれからパーティーしようよ」

「いいんですか？仕事を後回しにして」

「だってひどいんだよ。その猫、飼い猫じゃなくて野良なんだ。『思い出の首輪をつけて遊んでいたら逃げられたから取り戻してくれ』って」

「なんでそんなお願い聞き入れたんですか？」

「……季雨ちゃんは変わらないね。言いづらいことをさっさと訊いてくる」

私は笑った。あなたも変わってないよ。あの時みたいに暇そうなもの。

探偵さんは私たちを近づけて背中をまとめて押すと、スキップし

たくなるような声で言った。

「さあ、ワインでも飲みながらお祝いしようじゃないか！」

何気なく私は上を見上げた。

飛行機が空に描いた細い雲が、夕日に赤く染まっけてとても綺麗だった。

彼が隣で「運命の赤い糸」とつぶやく声が、今度ははっきりと聞こえた。

（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございました。海上なつです。

前書きで伝えたように、じゃあどうして恋愛にしたかと言うと、ただのチャレンジ精神なんです。恋愛が主の小説を書くのが苦手だから、展開の早い短編ならなんとかなるか！と、やってみたわけです。最初推理ものを書くこうとして探偵を登場させたのですが、今まで放置状態になっていました。トリックも何も考えてなかったし、何か青年が主人公に妙に強いひとめぼれをしてしまったようだったので、今になって急にジャンルを変更して続きを書いたわけです。そうです。すべてはあいつのせいです。（笑）

前半に鈍感な主人公のせいで彼の恋は不発で終わったけれども、未来はハッピーエンドです。

読者にすっかりされていないことを祈って それではまた、次の機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8179e/>

運命

2010年10月8日15時14分発行